

静岡県

平成27年3月16日

読書活動だより.65

編集・発行 静岡県読書推進運動協議会

静岡市駿河区谷田53-1
静岡県立中央図書館内
TEL 054-262-1246



読書とは一先入観なしに作者の世界に委ねること

静岡県読書推進運動協議会会長
伊藤 博

「読書とは」と問われると咄嗟に言葉にできませんが、著名な皆さんがそれぞれの読書について述べています。

芸術家・岡本太郎氏は、「さしあたり惹かれるものがなかったら、本を読むのもいい、この頃みんな本を読まないらしいが、本は自分自身との対話だ。思想的な本又小説なら少し真面目な生き方を見きわめるような本を読みながら、運命全体を考えてみるんだ」。

エコノミスト・勝間和代氏は、「すばらしい厳選された情報が、私たちが入手するときにはせいぜい数千円で買えるということも本を買うことのすばらしいところ。数千円であれば私たちが1～2時間働けば入手できる金額です。2時間の労働成果だけで、著者が何年も何十年もかけ培った情報と交換させてくれる」と述べています。

そして、最近、三宮麻由子さんという方の講演を聞きました。「読書とは、フィルターなしに作者と向き合い、作者の世界に自分を委ねること」、「すべて耳と皮膚の体感により感じ取り、光景をイメージする」、「自我をすてること」、「本の前では平等であり、評論家になってはいけない」、「読者として育つ」、「感じたものでなければ知恵にならない」とお話しされていました。

三宮さんは、4歳で失明され、盲学校等で教育を受け、アメリカにも留学され、上智大学大学院を卒業さ

れ、現在、翻訳のお仕事をしている方です。また、エッセイストとして絵本を出版し、ピアノ・短歌・生け花など様々な活動にも取り組まれています。

4歳までの光景をもとに体感を駆使して様々な知識を習得し、現在までになったとのこと。目がみえないことで、あらゆる先入観を捨て去ることで、作者の世界に委ねることができているとのこと。三宮さんは、耳や皮膚の感覚を通じて脳を働かせ、創造力を膨らませているのです。障害を乗り越えてチャレンジする姿は、筆舌しがたく、輝いて見えました。そして、三宮さんの読書に対する姿勢は、どんな人にもあてはまる読書の基本だと思いました。

読書とは、先入観なしに作者の世界に委ね、自分自身と向き合い、自分自身を客観的に見つめる時間となるとよいのではないのでしょうか。

参考

『自分の中に毒を持て—あなたは“常識人間”を捨てられるか』

(岡本 太郎 青春出版社 1993年)

『効率が10倍アップする 新・知的生産術』

(勝間 和代 ダイアモンド社 2007年)

『鳥が教えてくれた空』(三宮 麻由子 日本放送出版協会 1998年)

『そっと耳を澄ませば』(三宮 麻由子 日本放送出版協会 2001年)

《内容紹介 (もくじ)》

◎巻頭言

(静岡県読書推進運動協議会会長 伊藤 博)…………… 1

◎静岡県図書館大会・読書活動分科会報告…………… 2

◎平成26年度 優良読書グループ紹介

★(公社)読書推進運動協議会長賞(全国表彰)

すいせんの里読書会(浜松市)…………… 2

★静岡県読書推進運動協議会長賞(県表彰)

火曜会…………… 3

三島市立図書館点訳ボランティアグループ…………… 3

南中地域読み聞かせボランティア…………… 3

いずみ読書会…………… 3

おはなしの会 どんぐり…………… 3

おはなしの会 ピロシキ…………… 3

◎ユニバーサルデザイン絵本講演会 & 講座報告…………… 4

◎静岡県読み聞かせネットワーク全体講演会報告…………… 4

◎推薦図書…………… 4

静岡県図書館大会・読書活動分科会報告

平成26年12月8日(月)グランシップにて、第22回静岡県図書館大会が行われました。

今回は言語脳科学の研究者で、酒井邦嘉氏(東京大学 大学院総合文化研究科 教授)に「読書が育む脳 ～なぜ『紙の本』が人にとって必要なのか～」をテーマにお話いただきました。

まず、はじめに、言語脳科学の研究者の立場から、読書は①言葉の意味を補う「想像力」が身につく、②読書を通して思索に耽ることによって自分の言葉で「考える力」が身につく、③読書で味わった経験を脳に刻むことができる。しかも、これらのことが知らず知らずのうちに行為、脳は成長し、創られていくと読書が人の脳を育むことを話されました。

さらに、普及してきた電子書籍と紙の本を比較し、手軽に読める電子書籍ではあるが、そこでは得られない紙の本の勝点を数々挙げられ、紙の本がなくてはならないものであることを具体的に話されました。何よりも「紙の本は文字の位置情報、ページ数、重さ、手触り等々、五感に訴える力を持っている。紙の本のよさを無くした電子書籍は言わば『裸の王様』」という話は、私たちが電子書籍よりも紙の本のよさを感じてはいるものの、きちんと言葉で伝えることのできなかったもどかしさを払拭することができたお話でした。同時に心(記憶)に残る読書の大切さを強く感じました。「文明が進歩しても大切なものは簡単には凌駕されない」と言われる酒井氏の力強い言葉に安堵感をもちました。また、初めて知る私たちの脳の仕組み、脳の働きにも驚かされました。

「活字を読むことは、単に視覚的に脳にそれを入力するだけでなく、足りない情報を能動的に想像力で補い、曖昧な部分を解決しながら『自分の言葉』に置き換えるプロセスである」ことを脳の仕組み、脳の働きと共に再認識でき、2時間が短く感じた分科会となりました。



平成26年度 優良読書グループ紹介

(公社)読書推進運動協議会長表彰(全国表彰)

【すいせんの里読書会(浜松市)】

「すいせんの里読書会」は、昭和57年、積志公民館(現積志協働センター)の文学講座終了後、有志21名でスタートしました。昨年12月に50歳代の男性が入会し、現在は創設メンバー2名を含む9名で活動しています。平均年齢はだいぶ若返りました。最盛時には、30名程にもなり、講師の先生を招き勉強会を開いたり他の読書会とも交流を行ったりしてきました。例会に図書館長さんも参加して下さった時もありました。

本は浜松市の読書会文庫の中から皆で話し合っ て決め、積志図書館の方に借りる手配をして頂いています。時には通常の図書館の本を借りる事もあります。また、例会以外にも個人で買った本を回し読みもします。

例会では、まわり番で当番を決め、当番は、その月の会の司会をし、本の読後感想をノートに記入します。この32年間で、大学ノートで8冊になり、例会も平成27年1月で377回を数えました。好きな本ばかりでなく、自分ひとりでは読まないだろうと思う苦手な本も読むことができました。

例会の他にも、1月にはお食事会を楽しみます。また、読んだ本の映画化の時には、皆で映画館に足を運びます。そして本との違いなどを話し合います。また、会員の中には色々な特技や趣味を持っている人がいます。その人たちの話を聞くのも読書会の楽しみで、いつの間にか32年が過ぎました。

これからも今まで通り、「楽しい読書会」をモットーに続けていきたいと思 います。

(代表 笠原 佐知子)



静岡県読書推進運動協議会長表彰(県表彰)

【火曜会(下田市)】

「三十年の想い」

昭和58年8月、県立中央図書館主催の「読書活動指導者研修会」に参加、その折のテキスト、永井路子著「万葉恋歌」を記念すべき第1回のテキストとして、私たちの読書会はスタート致しました。

ふと気づけば30年、ささやかな活動でも1回も休会せず続けられたのは、仲間の誰かが必ず出席し、この輪を繋いでいたからです。

それが何よりの誇りと言えるでしょう。

否応なく世代交代が進む中で、平成5年の10周年記念誌「尚友」に続き、30周年の記念誌を、仲間の手作りで発刊できたことは夢のようで、大きな喜びでした。また「静岡県図書館大会」での表彰は、次への励みとなり、嬉しいご褒美でした。ありがとうございます。(代表 加藤 美百合)



【南中地域読み聞かせボランティア(御殿場市)】

平成13年、御殿場南中学校の求めに応じて保護者が集まり、南中学校で初めての読み聞かせを開始しました。平成14年度からは学校の年間行事に組み込まれ、毎週1回(年間約30回)朝読書の時間に読み聞かせを行っています。自分の子どもが卒業した後も、地域住民としてボランティア活動を継続し学校を応援していきたいとの願いから、グループ名を「南中地域読み聞かせボランティア」としました。

絵本のほか詩の朗読や本の紹介など、各々が工夫をして生徒たちに本の良さを伝えられるよう努めています。今年度は、日本文学の名作や古典作品の朗読など、中学校と連携した新たな取組を行いました。これからも息の長い活動を続けていきたいと思っています。(代表 菊池 いづみ)



【おはなしの会 どんぐり(浜松市)】

昭和58年4月旧天竜市立図書館(以下図書館)主催「絵本の読み聞かせ講座」受講修了生有志が集まり、絵本の読み聞かせを主体とした活動を月1回のペースで始めました。昭和63年まで単独で市内の団地、神社での夏季出張読み聞かせをし、昭和60年から毎週土曜日午後図書館のおはなし会「おはなしポケット」に月1回、平成10年から図書館読書普及事業に年に1、2回参加しています。同時に大型絵本「はらぺこあおむし」、大型布製絵本「あまがえる」、大型紙芝居「ぐりとぐら」、「なかよし自転車」を製作しました。現在通常の読み聞かせ活動の他に大型ペープサートを製作し、活動発表に向けて練習を重ねています。(代表 内山 のり子)



【三島市立図書館点訳ボランティアグループ(三島市)】

三島市立図書館点訳ボランティアグループは図書の点訳データを作成しています。

平成9年の三島市立図書館の新館開館にともない結成され、現在18年目を迎え、10名のボランティアで活動しています。

活動は全体の研修会を年10回開催し、個々で調査と点訳データ入力が続けています。作成資料総数は延べ94タイトルになりました。

作成した資料は三島市立図書館へ寄贈しています。また、視覚障害者情報総合ネットワーク(サピエ)においても点訳データの提供を行い、全国の視覚障がい等の方たちにも利用していただいています。

これからも楽しく活動続け、障がいがある方たちのよりよい読書環境づくりのため貢献してまいります。

(代表 高橋 洋子)



【いずみ読書会(富士市)】

読書会は昭和46年、市統括公民館長奈木盛雄氏を代表に、7名で発足しました。グループ名は地区を滾々と流れる清らかな湧水を、尽きることのない豊かな読書活動と結びつけました。1年間の計画を立て、毎月第3火曜日に吉永まちづくりセンターに於いて読書会を開催します。市立中央図書館所蔵読書会テキストを用います。

一冊の本を、仲間と共に読む楽しさ。湧き出る感想や思い。人生・人・時代・社会等々、熱く真摯に語り合う仲間と共有する嬉しさ。秋には文学散歩を行います。また、我が市出身の小糸のぶ文学碑設立、吉永を父祖の地とする吉村昭・津村節子氏招聘等も行いました。地域や市の文化活動にも携わっています。



【おはなしの会 ピロシキ(南伊豆町)】

おはなしの会ピロシキは、南伊豆で唯一の読み聞かせボランティアグループです。活動歴は15年目に入り、現在6名で活動しています。保育園から老人会まであらゆる年齢層を対象に絵本を紹介しています。紹介の仕方も様々で、大型絵本や紙芝居をはじめ、エプロンシアター、大道具・小道具は全て手作りで人形劇風にしたりもします。

小学校の朝の読み聞かせや図書館での年3回のおたのしみ会、また年1回の公演会は、今年で8回目を迎えます。絵本を大型スクリーンに写し、ピアノの生演奏と共に紹介する方法は毎回、皆さんが楽しみにしてくれています。これからも、子供達が心豊かに育ってくれる事を願い、様々な絵本を紹介していきたいです。

(代表 小林 祐子)



ユニバーサルデザイン絵本 講演会&講座報告

平成26年10月18日(土)、掛川市立中央図書館において、静岡文化芸術大学の林左和子先生・林容子先生による講演会「ユニバーサルデザイン絵本とは～共に楽しむことのできる絵本を考える～」並びに講座「ユニバーサルデザイン絵本を作ってみよう」が行われました。

講演会では、障がいについて理解を深める絵本の紹介や、読み聞かせなども交え、ユニバーサルデザイン絵本の現状についてお話されました。講座では先生のほか、学生スタッフも加わり、参加者は丁寧な指導を受けながら絵本を作成しました。どの参加者の作品も完成度が高く、先生方も感心されていました。

参加者からは「説明がわかりやすく、ユニバーサルデザイン絵本のあり方について考えさせられた」などの声が寄せられました。

また、会場では「世界のバリアフリー絵本展2013



ーIBBY障害児図書資料センター2013推薦図書展ー」(企画:国際児童図書評議会障害児図書資料センター)も同時に行われ、大変好評でした。

静岡県 読み聞かせネットワーク 全体講演会報告

演 題:「大人が絵本をひらくとき」

日 時:平成26年11月3日(月・祝)

14時00分～15時30分

講 師:宮本 淳子氏(常葉大学短期大学部助教・元K-mixパーソナリティ)

参加者:79人

絵本は子どものためのものというイメージがまだ強いと思いますが、大人ならではの読み方や感じ方に迫ってみましょう。

ー絵本の物語構成やメッセージ性について、絵本の朗読をしながらお話をしてくださいました。

また、宮本講師の朗読は、表情も豊かに、魅力ある美しい声がとても印象的で、聞き手の心に素直に伝わる心地良さもありました。

大人も絵本を見直して、子どものためにも、自分のためにも絵本を勧めたいと感じました。また、柳田邦男氏のお話(人生で3度絵本を読む、①子どもの頃読んでもらう ②大人になって子どもに読む ③自分のために読む)もされました。



静岡県読書推進運動協議会推薦図書

☆☆☆シニア世代向け☆☆☆

『まど・みちおー懐かしく不思議な世界』
谷 悦子/著(和泉書院 2013.11)

『「自由」のすきま』
鷺田 清一/著(KADOKAWA 2014.3)

『県民ごはん、作ってみました！
ー自宅で日本のグルメ紀行ー』
もぐら/著(大和出版 2013.8)

『約束の海』
山崎 豊子/著(新潮社 2014.2)

『最初の質問』
長田 弘・いせひでこ/著(幻冬舎 2013.12)

『下りのなかで上りを生きる』
鎌田 実/著(ポプラ社 2014.3)

☆☆☆ヤング世代向け☆☆☆

『中高生のための「かたづけ」の本』
杉田 明子・佐藤 剛史/著(岩波書店 2014.4)

『鹿の王』(上・下)
上橋 菜穂子/著(KADOKAWA 2014.9)

『心の力』
姜 尚中/著(集英社 2014.1)

『嫌われる勇氣
ー自己啓発の源流「アドラー」の教え』
岸見 一郎・古賀 史健/著(ダイヤモンド社 2013.12)

『女のいない男たち』
村上 春樹/著(文藝春秋 2014.4)

『村上海賊の娘』(上・下)
和田 竜/著(新潮社 2013.10)